
Future Battle ~ 星屑の記憶 ~

刻焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Future Battle ～星屑の記憶～

【Nコード】

N2243Y

【作者名】

刻焔

【あらすじ】

時は未来、バトルゲームが進化し人の意識をバーチャル世界へと送り、仮想空間でのバトルを実現していた。

人々はそのプレイヤーたちを『バーチャルダイバー』と呼ぶ。

【主人公】 零夜こと鷹月雅也が様々な出会いや戦いを繰り広げる学園物語である。

プロローグ(前書き)

突発した始まり+駄文ですが、よろしくお願ひします!!

プロローグ

バトルドーム第二アリーナで、まもなく注目の一戦が始まるうとじていた

『日本バトルリーグ準決勝

ファイールド：海上（昼）

出場者：零夜れいやVSオーデイン』

そう会場内のモニターに表示されていた

会場内は観客で賑わっており、今かいまかと待っていると、突然会場の中央から白いスモークが噴射され、その中から人影が飛び出して来た

『レディース&ジェントルマン！待ちに待った準決勝のスタートだ！！』

司会者である草薙剛輝くさなみこうきの登場と共に、会場内にワーツ！！という歓声が響き渡る

『それではまず選手の紹介だ！』

剛輝が赤く塗られたゲートの方を指さすと最初の登場と同じく白いスモークが噴射され、その中からオーデインことシリング・フォードが出てきた

『レッドゾーンから出てきたのは【フェンリル】の二つ名を持つオーデイン選手だ。

今までの戦闘では多彩なパフォーマンスや圧倒的な力を見せて

くれたダイバーだ！

今回のバトルではどんなパフォーマンスを見せてくれるのか楽しみだ！！

続いてブルーゾーンの紹介だ！』

先ほどと同じく白いスモークが噴射され、その中から零夜こと鷹月たかづき雅也まが出てきた

『ブルーゾーンから出てきた零夜選手は期待のルーキーだ！

これまでの戦果は新人とは思えない位の勝ち星を得ている。

【謎のダイバー：飛天ひてん】が打つことのできなかつた終止符を、零夜選手は打つことができるのか！
続いて今回のバトル説明だ』

モニターに海上エリアが写し出される

『今回のフィールドは御覧の通り海上だ、海に落ちても問題は無いが、深度が深くなるほど動きが鈍るので気を付けてくれ！

なお、このフィールドでは飛行ユニットの使用が義務受けられているので、ユニット選びも勝負の分け目だぞ！

それでは両者、ダイブユニットへ！！』

零夜とオーデインはそれぞれダイブユニットへ乗り込み、VBデバイスを設定した

『両者とも準備完了みたいだな、それでは！【バトルシステム・オン、バーチャルダイブ！！】』

ユニット内の二人の意識が脳空間へと送られ、二人の姿がモニターに表示されていたフィールド内に現れる

『零夜選手はどうやらノーマルのジェットブーツを選択したようだ。それに対しオーデイン選手はウイングスラスターのようだ、
独自改良されているようだ。その推進力は如何なっているのか見ものだぞ！』

「（これに勝てば決勝だ。気を引き締めていくぞ！）」

「その表情、俺に勝つつもりでいるな。だが、お前の実力では俺には勝てない」

「ルーカーだからって侮らないでください、ある人からみっちり戦い方や戦闘技術を学びましたから」

「フツ、そいつは楽しみだ。なら遠慮なく行かせてもらう」

レッドシグナルが点灯すると同時に二人が身構える

『さあレッドシグナルが点灯し、今赤から青に……変わった！！バトルスタート！』

その瞬間、零夜は忍刀を両手に持ち、オーデインはジャツジメントボール（以後JBと表記）の形状を槍へと変え両者が激突する

「くっ、くそ！」

「どうした、そんなリーチじゃ俺には届かないぜ。それともスピードでなら俺に勝てると思っただのか？」

「僕の戦い方がスピード重視なのは知ってるでしょ、【戦場の支配者】さん」

「……………その名で俺を呼ぶな、裏の通り名は嫌いなんだ！」

オーデインは零夜を弾き飛ばすと、即座に槍からサーベルへと形状を変化させ一気に突っ込んで行った

零夜はギリギリの所でサーベルを受け止めるが海へと叩き落されてしまった。

『ああと、零夜選手海へと落とされた！これは不味いぞ、どうなる零夜選手！』

「（やっぱり強い、だけど負けるものかっ！）」

零夜は体制を立て直し、海上へ上がる

…はずだったのだが、気づいた時には目の前にオーデインが居た

「なっ!?!」

「この俺がお前を海に落とすただけで攻撃を止めると思ったか！」

オーデインはレイピアを使い、零夜の体を貫いていた

零夜（LG）

20

『おおっと、ここでオーディン選手の攻撃が入った！オーディン選
手には相手ライフがどうなっているのかは見えないが、強烈な一撃
が入ったぞー！』

オーディン（LG）

『なんだ？オーディン選手のライフも下がったぞ！？一部リピート
だ！』

モニターに零夜が刺される瞬間の映像が流れ始める

零夜の体にレイピアが刺さる瞬間、零夜の手にはクナイが握られて
おり

レイピアが刺さると同時にオーディンの体に向けクナイを持った腕
を伸ばしていた

『なんと、今の一瞬に零夜選手も反撃していたー！』

「やるな、さすがの俺も今の一撃はかわせなかったぜ。だがくらう
のはこの一撃だけだー！」

オーディンは海上へ向けて移動し始め、それを追うように零夜も移

動し始めた

両者が海の中から飛び出し、再び空中戦となる

「少し侮っていたな、本気で行くぞ」

そう言うとオーディンはJBの形状をヒュプノスの使用するガンブレードへと変えた

「なっ!?!その武器は!」

「そう、ヒュプノスの使用しているタイプだ。JBは記憶していればどんな物にもなれるようにプログラムを組んだ
何度か対戦してるからな、能力までしっかりと覚えているぞ」

「…マジっすか」

『JBの真骨頂の一つ、相手武器のコピー能力！

これまで幾つもの武器をコピーし相手を倒してきたのかはわからないが、
必ずと言っていいほど、一試合に一度はコピー武器を使用しているぞ!』

「たとえどんな武器を使ったとしても、僕は負けない!」

「その意気だ!」

零夜は大太刀をオーディンはガンブレードを構え、互いに突撃をかけるが

両者の武器がぶつかる瞬間、フィールド全体が激しい光に包まれ、その場に居たはずの二人が消えた

同時刻

第一アリーナで試合をしていたツバメとヒュプノスも同じようにフィールドから姿を消した

プロローグ（後書き）

次回は登場人物の紹介です。

キャラクターは登場することに紹介に追加していきます。
とりあえず主要人物は先に載せますけど

主要人物紹介（前書き）

タイトル変更とキャラの追加です

主要人物紹介

名前 たかづき
鷹月 まさや
雅也

ログイン名
れいや
零夜

年齢
16歳

性別
男

生年月日
11月28日

血液型
O型

身長
164cm

体重
48kg

目の色（現実／バーチャル）
茶色／赤色

髪型（現実／バーチャル）

シヨート／ちょんまげ状のロング

髪の色（現実／バーチャル）

黒色／シルバー

メインスキル

風・闇

スキル発生装置

手甲（オリジナルカスタマイズ）

戦闘スタイル

敵の視界外からの奇襲をメインとした、**隠密戦闘**

初期使用武器

忍刀

手裏剣

クナイ

鉤縄

常備アイテム

閃光弾

発煙弾

備考

今作の主人公

私立星鈴高校一年生

昔から忍者に憧れており、そのため『**ダイブバトル**』では、主に**忍**びの道具を使っている

侍好きの燕とはいつも口喧嘩をしているが、時間が経つといつも笑いあっている
元々『ダイブバトル』には興味がなかったのだが、近所に住んでいる兄貴分の加賀に誘われやり始めた

名前

加賀 征一郎かが せいいちろう

ログイン名
ブリード

年齢
18歳

性別
男

生年月日
9月18日

血液型
O型

身長
174cm

体重

62kg

目の色（現実／バーチャル）
茶色／黒色

髪型（現実／バーチャル）
ショート

髪色（現実／バーチャル）
黒色／緑色

メインスキル
雷・風

スキル発生装置
ガントレット（自己カスタム）

戦闘スタイル
ククリとトンファーを使い分けた、高速近接戦闘

初期使用武器
ククリ
トンファー
ショットガン
時限式グレネード

常備アイテム
閃光弾
発煙弾
転移マーカ―

HPドリンク

プロフィール

雅也の家の近くに住んでいる兄貴分

雅也をこのゲームに誘った本人であり、同時に彼の師匠でもある

同じクラスの夢路とは仲が良く、たまにチーム戦が苦手な彼と組んで試合に出ている（主に夢路の援護）

夢路と仲が良いせいか、彼の妹の千冬に邪魔扱いを受ける事が多々ある

いつでもテンションが高く、その場に居るだけで周りの空気を明るくするムードメーカー

名前
瞬刀しゅんとう 燕つばめ

ログイン名
スギア

年齢
18歳

性別
男

生年月日
5月20日

血液型

B型

身長

174cm

体重

61kg

目の色（現実／バーチャル）
茶色／琥珀色

髪型（現実／バーチャル）
癖毛のあるショート

髪色（現実／バーチャル）
黒色／紺色

メインスキル
炎

スキル発生装置
ブレスレット（オリジナルカスタマイズ）

戦闘スタイル
刀を主体とした、近接格闘戦

初期使用武器
打刀・火月
打刀・雷月

短刀・水月
オートマチック

常備アイテム
発煙弾

備考

私立星鈴高校三年生

よく授業をサボる癖があるが、計算してサボっているため、出席日数や単位などはギリギリ足りている

戦闘では刀を使う近接戦を好み、多人数戦でも滅多なことでは負けたりはしない

近接戦は最高クラス並みの実力を持っているが、それとは真逆に射撃戦が苦手である

銃は持っているものの、その使用率はほぼ0に等しい
その理由はツバメの射的センスが百発中四十発だからである

個人戦は得意だがチーム戦は苦手で、チームを組んだとしても単独行動が目立ってしまう

名前
はるの
春野
れん
恋

ロゲイン名
ミスナ
水那

年齢

17歳

性別
女

生年月日
7月7日

血液型
O型

身長
158cm

体重
42kg

目の色（現実／バーチャル）
茶色／桃色

髪型（現実／バーチャル）
背中半ばまでのロング／肩に少しあたるセミロング

髪色（現実／バーチャル）
赤茶色／桃色

メインスキル
風・光

スキル発生装置
ブレスレット改ノーマルタイプ

戦闘スタイル

ウイングスラスターの機動力を生かした短期戦型

初期使用武器

ダガー

青竜刀

オートマチック

スナイパーライフル

常備アイテム

HPドリンク

強化ドリンクセット

閃光弾

プロフィール

私立星鈴学園高等部二年生

燕の幼なじみで家もすぐ近くである

少々天然な面があるが、入院中の兄の世話をしている

学力は学年一位の成績だが運動はまあまあ、普段からサボっている

燕をいつも注意している

戦闘では、ウイングスラスターを使った戦い方を好んでおり、その機動力を最大限生かした高機動戦で敵を翻弄する

チーム戦となれば、後方支援へと戦い方を変える

名前

風凧 かぜなぎ
夢路 ゆめじ

ログイン名
ヒュプノス

年齢
18歳

性別
男

生年月日
7月28日

血液型
B型

身長
176m

体重
62kg

目の色（現実／バーチャル）
茶色／赤色

髪型（現実／バーチャル）
ショート

髪色（現実／バーチャル）

黒色 / 黒色

メインスキル

炎・闇

スキル発生装置

ブレスレット（オリジナルカスタマイズ）

戦闘スタイル

ガンブレードを主体とした近接特化

初期使用武器

ガンブレード

暗黒剣（大剣）

常備アイテム

閃光弾

備考

私立星鈴高校三年生

「学校はつまらない」とか「面倒だから行きたくない」と言ったりに三年間、無遅刻 無欠席である。

成績は兄妹揃って学年首位。

戦闘はガンブレードと暗黒剣の両方を完璧に使いこなす。

タナトスとは真逆でチーム戦が苦手で個人戦になると驚異的な能力を発揮する。

名前 かぜなき
風凧 ふゆみ
冬美

ログイン名
タナトス

年齢
16歳

性別
女

生年月日
12月25日

血液型
A型

身長
156cm

体重
46kg

目の色（現実／バーチャル）
茶色／赤色

髪型（現実／バーチャル）
セミロング

髪色（現実ノバーチャル）
黒色ノシルバー

メインスキル
氷・光

スキル発生装置
ブレスレット（オリジナルカスタマイズ）

戦闘スタイル
ガンブレードを主体とした近接特化型

初期使用武器
聖剣：白式？（大剣）
ブレイバー（大剣）
ガンブレード

常備アイテム
閃光弾

プロフィール
私立星鈴高校一年生
学校では“超”が付くほど真面目で成績は学年首位。
兄 夢路の事が大好きで休み時間や休日などは常に一緒に過ごしている。

戦闘ではガンブレードしか使わない（使えない）。二本あるうちの一本“聖剣：百式？”はヒュプノスが持つ暗黒剣と対になる剣である。

個人戦は苦手だがチーム戦になると驚異的な能力を発揮する。

名前

シリリング・フォード

ログイン名

オーデイン

二つ名

フェンリル

裏の通り名

戦場の支配者

年齢

16歳

性別

男

生年月日

12月24日

血液型

AB型

身長

168cm

体重

52kg

目の色（現実／バーチャル）
ブルー／ブルー

髪型（現実／バーチャル）
モン○ンのレウス

髪色（現実／バーチャル）
プラチナ

メインスキル
氷

スキル発生装置
ガンドレット（ノーマルタイプ）

戦闘スタイル
オーソドックス

初期使用武器
三節棒
スナイパーライフル
アサルトライフル

常備アイテム
強化ドリンク
閃光弾
容量アップ

母国（出身地）

イギリス（ロンドン）

備考

私立星鈴高校一年生の留学生

イギリス生まれの少年

青い瞳に銀色の髪の毛そして見た目通りの冷たい感じで人を寄せつけない

普通にしているも目つきが鋭いと言われる

性格も冷酷そうだが

見た目に反し誰にでも優しく他人でも30分くらい話すとすぐに仲良くなる

話が合うとすればホームズが一番良い

……… 最初に相手が逃げなければ

スポーツ万能でよく高校で部活の助っ人として呼ばれることがある
分析能力にも優れており

将棋、囲碁、チェスなど戦略系のゲームでは負けたことがない

しかし勉強はあまりよろしくない

このゲームには学校でよく話題になったので
試しにしたところハマってしまった

個人戦よりチーム戦のほうが得意で自分がチームリーダーになった
ときは

やはり勝率100%という

驚異的な数字を叩き出している

個人ランキングには上位の下側にいるが
チーム戦での勝率ではトップクラスである

名前
かみぬま
神沼
せい
いち
聖一

ログイン名
ベルフェゴール

年齢
26歳

性別
男性

生年月日
02月30日

血液型
A型

身長
186cm

体重
73kg

目の色（現実／バーチャル）

黒／右・緑 左・紫

髪型（現実／バーチャル）

ショート／ロング

髪色（現実／バーチャル）

薄い茶色／青みがかった黒

メインスキル

光&雷

スキル発生装置

試作型リング（ノーマルタイプ）

初期使用武器

実盾（中）

ランス

アサルトライフル

常備アイテム

発煙弾、閃光弾

備考

イナム社（『ダイブバトル』の制作会社）の社員で同社を代表するプレイヤー。

悪魔を連想させる名だが毅然とした振る舞いや、高貴さ漂うその見た目と騎士道を重んじる性格で他のプレイヤー達からは「聖騎士」と呼ばれている開発元の社員だけあり戦闘能力は高く、白兵・射撃どちらにも優れているが特に槍術に長けている。

主要人物紹介（後書き）

本編が始まった後に『登場人物紹介』を追加します

次は裏版『主要人物紹介』です

主要人物紹介（裏（前書き））

主人公とは対立キャラ？です

主要人物紹介（裏）

名前
ゆみなが
弓永
さくら
暁

ログイン名
ベルセルク

年齢
21歳

性別
男

生年月日
3月28日

血液型
A B型

身長
172cm

体重
61kg

目の色（現実／バーチャル）
茶色／緑色

髪型（現実／バーチャル）
シヨート

髪色（現実／バーチャル）
黒色／紅色

メインスキル
水・光

スキル発生装置
ガントレット（オリジナルカスタマイズ）

戦闘スタイル
近接戦闘を得意とするが、装備する武器次第でどんな距離でも完璧にこなす

初期使用武器
ハルバート
大太刀
シヨットガン
弓（日本タイプ）
E盾（小）

常備アイテム
閃光弾
発煙弾

プロフィール
あまり人との接触を好まず、1人で居る事が多い

『天空の支配者』の称号を持っている飛天に興味がある
飛天とは別に、最近現れたルーキー『零夜』・戦場の支配者と呼ばれている『オーディン』にも興味を示している
学校ではまともに授業を受けて居るが、休み時間の彼の行動は不明である

ログイン名

飛天^{ひてん}

性別

男

目の色ノ（バーチャル）

シールドで目元が隠れているため不明

髪型ノ（バーチャル）

ヘルメットをしているため不明

髪色ノ（バーチャル）

同上

ヘルメットデザイン

上から見ると三角形の形をしており、全体的に丸みを帯びている
シールドは目元が隠れる程度しかない
白主体で、青いラインが入っている

メインスキル

炎

スキル発生装置

ガントレット（オリジナルカスタム）

戦闘スタイル

持ち前の機動力を生かした、高機動近接格闘戦

初期使用武器

大太刀・烈火

小太刀・雪羅

打刀・小烏丸（小烏造り）

グレネード付きライフル

常備アイテム

発煙弾

閃光弾

転移マーカー

強化ドリンクセット

プロフィール

ヘルメットを装備している謎のプレイヤー

空中戦を好み、その実力は空中戦を主体とするプレイヤーのトップに立つほどである

リアル世界では正体を隠しており、大会会場にもヘルメットを着けて登場している

飛天の正体を知っているものはごく一部の人間のみである

名前
はつとり
服部 亮一
りょういち

ログイン名
???

年齢
34歳

性別
男

生年月日
6月8日

血液型
O型

身長
182cm

体重
71kg

目の色（現実／バーチャル）
茶色／？色

髪型（現実／バーチャル）
ショート／？

髪色（現実／バーチャル）
黒色／？色

メインスキル
????

スキル発生装置
????

戦闘スタイル
????

初期使用武器
????

常備アイテム
????

プロフィール
服部商会と呼ばれる模型店の店長

町外れの路地裏にある寂れた模型店で、
この店を知っているものは数少なく、知っている者にとってはちょっ
つとした穴場になっている

この店の三階には、なぜかは知らないが『ダイブユニット』が二、
三台ほど置いてある

名前

不知火しらぬい

影治えいじ

年齢

26歳

性別

男

生年月日

7月16日

血液型

B型

身長

182cm

体重

76kg

目の色（現実／バーチャル）

黒色／右・黒 左・スカイブルー

髪型（現実／バーチャル）

ショート（ティエリ〇のような）

髪色（現実／バーチャル）

薄い茶色

メイン属性

火・雷

スキル発生装置

試作型リング（オリジナルカスタム）

戦闘スタイル

ハンドガンの牽制を活かしたレイピアの近接戦闘

初期使用武器

レイピア

バックラー

ハンドガン

ダガーナイフ

常備アイテム

閃光弾

発煙弾

プロフィール

神沼とイナム社の代表の座を争い、ギリギリの勝負で敗北してしま
ったため神沼を恨んでいる

休日などを利用し、神沼を陥れるために動いているらしいが
そのほとんどが飛天によって邪魔されている

名前
邪山やま 火劉ひりゅう

ロゲイン名
火厭ひえん

年齢
17歳

性別
男性

生年月日
08月18日

血液型
AB型

身長
163cm

体重
52kg

目の色（現実／バーチャル）
茶色／赤紫色

髪型
ショート（剃りのような）

髪色（現実／バーチャル）
黒色／茶色

メインスキル
火・氷

スキル発生装置
ブレスレット改ノ（ノーマルタイプ）

戦闘スタイル
ハンドガンと小太刀の連携技（近接戦闘）

初期使用武器
小太刀

ハンドガン（リボルバー）
実盾（中）

常備アイテム
回復アイテム
予備カートリッジ

プロフィール
私立高校二年生。

頭脳と運動神経は学校の一、二を争うほど優れている
普段の授業は抜け出しているのだが、何故か体育だけは真面目に出
る。クラスではいつも窓から外を見ていて友人は一人もいない。
タッグを組んでの戦闘では対人関係が苦手なため単独行動をしてし
まう、そのためチームメンバーからの反感を買うことが多い

01st Battle 『運命の始まり』 (前書き)

さあっ！ 始めました第一話！！

結構緊張してます。

なんせ本気で書くオリジナル小説ですからね、
気を引き締めないと
！！

それでは本編の方をどうぞ！！

O 1 s t B a t t l e 『運命の始まり』

僕は今、ダイブユニットの中にいる

何でこんな事になったのだろうか・・・

何で僕はこんなところにいるのだろうか・・・

すべての始まりは数時間前、今朝の事が原因なんだろうな・・・

五月、どこまでも澄み切った青い空

鳥の鳴き声が聞こえ、五月にしては少し暖かい感じのする朝だ

そして僕はそんな朝を感じながら、学校への道をのんびりと歩いていた。

「お〜い、雅也!」

「ん?あ、加賀さん、おはようございます」

「おう、おはよう。相変わらず早いなあお前は」

僕に話しかけてきたこの人は『加賀征一郎』近所に住んでいる僕の兄貴分だ

「加賀さんこそ早いじゃないですか、どうかしたんですか?」

「ちよつとな、お前に見せたいものがあるんだよ」

「見せたいもの?」

加賀さんは鞆の中から一枚のチラシを見せてきた

「『第一回 ダイブバトルチーム対抗マルチミッション大会』?何ですかこれ」

「大会は八月にあるんだけどさ、締め切りが五月いっぱいなんだよ」

そんなことはどうでも良い、僕が本当に聞きたいのは

「これって、ゲームですよね」

「そうだけど?それがどうかしたのか」

はあ、全くこの人は・・・

「僕がゲーム嫌いなもの知ってるでしょうが」

そう、僕はゲームが嫌いなのだ

なぜかって？どんなゲームでも全員が僕を集中的に攻撃してくるからだ

いじめめな事も何度もされた、・・・思い出しただけで嫌になる

「なのにこんなゲームに誘うのはひどいと思うんですけど」

「大丈夫だって、このゲームは指でコントロールするようなゲームじゃないんだぜ」

僕はそんなのあるわけがないみたいな顔をしていたのだろう、加賀さんは何かを察し言葉をつなげる
今度はかなりシリアスな表情になって

「このゲームはな、プレイヤーの意識で操作することが出来るんだ」

・・・なんてわかりにくい説明なんだろうか、ここで加賀さんの説明下手のスキルが発生するとは予想外にもほどがある

「あの、もうちょっと詳しく説明して貰って良いですか？」

意識で操作って、ふつうのゲームまんまじゃないか！！？

「ああ悪い悪い、端折りすぎた」

はあ、この人のペースについて行けない

「簡単に説明するが、このゲームはプレイヤーの意識をそのままバーチャル世界に送り込むんだ。そしてそのバーチャル空間でバトルやちょっとしたイベントをやるんだよ。」

もちろん痛みは感じないぜ、痛みを感じるんじゃ武器を使ったバトルなんて出来ないからな」

「それは分かりましたけど、そのゲームの大会に僕と出ようって事ですか？」

「お前だけじゃないぜ、夢路と冬美ちゃんだろ、・・・燕は断りやがったな。」

「ってことで俺とお前を合わせて四人だな」

「人数制限無いんですか？」

「人数は3〜5人、武器は自由、エリア等は当日まで解らない、締め切りは五月の終わりまで、これ位かな？」

「五月って、もう半分すぎてますけど？」

「だから大急ぎでお前を誘ってるんじゃないか」

うん、加賀さんの良い笑顔だ。・・・こういう笑顔の時は関わらない方が身のためだと、今までの経験が言っている

「どうだ、やってみないか？」

「お断りします」

「いや、お前ならそう言ってくれと、……今、なんて？」

「お断りします」

「何だよ！！こんなに面白いゲームは他にないぜ！」

「そろそろ学校に行かないと遅刻しますよ」

「へっ？」

加賀さんはあわてて時計を見て青さめた。遅刻するって言うてもまだ時間には余裕が

「悪い雅也、夢路と約束があつたんだ！それじゃな！！」

そう言い残し加賀さんはすごい勢いで走って行ってしまった

残された僕はというと、のんびりと学校へ足を運んだ

時は昼休みへと飛ぶ、僕は購買部でパンを買い屋上で昼食を取っている

はあ、このんびりとした昼食が一番幸せだ。

そう感じている矢先に、屋上の扉がバンツ！とという音を立ててあけられる

「雅也居るか！！？」

「何ですか加賀さん、朝の件なら断りましたよね」

「はあ！？おい加賀、今朝OK貰ったって言ってなかったか！！？」

「まあまあ、落ち着けよ夢路」

屋上へ来るなり加賀さんと騒ぎをたてている人は『風凧夢路』加賀さんと同じクラスで親友同士らしい

「兄さんが怒っているのは加賀さんのせいだと思います」

夢路さんの事を兄さんと呼んでいるこの少女は『風凧冬美』僕と同じ一年生で同じクラスだ

「冬美ちゃん、男には嘘を吐かなきゃならない時があるんだよ」

「なに涼しい顔して言い訳してるんですか」

「まあ、そんなことは置いといてだ。雅也、お前の使用する武器を決めるぞ」

「えっ！？僕はゲームなんてしないって言ってるじゃないですか」

何度言えば良いのだろうか、加賀さんあきらめが悪いからな

「それに大会への参加メンバーなら他を当たってくださいよ！」

「大会への参加はこの際どうでも良い！！」

あ、どうでも良いんだ。

なんか後ろの方で『全っ然よくないのに、何を言ってるんだ』『加賀さん、鷹月君をダイブバトルに誘うことしか頭に無いみたいですね』そんな会話が聞こえてきたのだが、今の僕がまともには聞こえるはずがない

「今日の放課後、ダイブセンターに行くぞ。そこでお前のアカウントを作る」

「は、はあ、・・・って！？はあ！！？何いってるんですか！僕はやらないって言ってるでしょうが！！」

「一度だけやってみてくれ、頼む！！その後でやるやらないはお前の自由だから！」

あの加賀さんが頭を下げるなんて、風凧兄妹もビックリしている。

仕方がない、加賀さんが此処までするのは何か理由があるのだろう

「はあ、わかりましたよ。一度だけですからね」

「おおっ！分かってくれたか。俺お前のそういうところが好きなんだよ！」

喜んでくれたのは良いけど、・・・なんかはめられた気分だ

そして放課後、僕は逃げ出してみようと試みたのだが

「男に二言はないという言葉聞いたことがあるのですが、屋上で
の言葉は嘘だったんですか？」

つと言われ、逃げられなくなってしまった

そんなわけで僕たちは、ダイブセンターの目の前にいる

「さて、ちゃっちやとアカウント作るぞ」

「分かっています」

僕は渋々アカウント作成所まで連れて行かれた

「ほら、このタッチパネルを操作してアカウントを作成するんだ」

「分かりました」

『ようこそ、まずは男性か女性かを選択してください』

僕が座席に座ると同時に、アナウンスが聞こえてきた

「えっと、男性っ」と

ピットという音と共に次の画面が出てきた

『次にプレイヤーネームを入力してください』

・・・ここはもちろん【RE・I・YA】変換つと、【零夜】
僕が昔から使っているゲームネームだ

「お前相変わらずだな」

「ほっといってください!」

『次に初期使用武器を設定してください』

画面に武器のリストが映し出されたが・・・はっ?なんだこの量は、
数え切れないほどのページ数が出てきた

「加賀さん、何ですかこの量」

「この世界に存在する武器のリストだ」

「存在する武器って、ガンブレードや神話の武器があるんですが」

「ゲームの中に存在してるからじゃないか？ただガンブレードは癖があるから使わない方が良さぞ」

「そうなんですか、……………あっ！」

数あるリストの中からこれらを見つけたのは奇跡に近いかもしれない

「どうしたんだ？」

「加賀さん、僕の好きなもの知ってるでしょ」

「ああ、忍者だろ。……………ああ、そう言うことか！」

「はい、忍者の道具一式見つけました！！」

僕はこれ以上ない喜びの中、忍者の武器と道具を選んでいったのだが

「ブーブーブー」

「うわっ！なんだ？」

『武器の所持数は四つまでです。選択し直してください』

そのアナウンスと共に、選んだ武器はリセットされリスト画面に戻ってしまっただ

「ああ悪い、言い忘れてた。武器の所持数は四つまでだからしっかり選んだ方が良さぞ」

「遅いですよ!！」

全く加賀さんは、肝心な説明が抜けるなんて、選択し直しか・・・

「えっと、それなら」

これとこれと・・・うん、これなら妥当だろう

ピッ【忍刀】・ピッ【手裏剣】・ピッ【クナイ】・ピッ【鉤縄】

後は決定ボタンをっつと、ピッ

『続いて衣装を選択してください』

武器同様、とんでもない数のリストが表示された。

・・・・・・前言撤回、今度は新しくオリジナル作成の選択肢が増えていた

これを使うとしたらどれだけの時間がかかるのだろうか

まあいいや、【忍び装束】さえあればしばらく使わないだろう

『次にデバイスカラーを選択してください』

まさかこんなサーブिसまでついているとは、カラーリングは黒っと

『最後にパスワードの設定をしてください』

パスワードか、どうしようかな

「加賀さん」

「どうした？」

「パスワードってどうしたんですか？」

「いくら雅也でも、俺のパスワードを教えるわけにはいかねえな」

「どうしてですか」

「このパスワードはデバイスを使用するためのものだ、むやみやたらに教えたなら勝手に使われるだろうが」

「僕は加賀さんのデバイスなんて使用しませんよ」

「お前はそうかもしれないが、周りにいる奴らが聞いてたらアウトなんだよ。」

そう言うわけだから、パスワードは自分で考えな」

「・・・分かりました」

さてどうしたものか、今までパスワードなんて考えたこともなかったからなあ

・・・これでどうだ。【*****】

『パスワードが承認されました。このパスワードは必ず必要となる為、忘れないようメモを取っておいてください』

メモか、携帯で良いよな

さてと、メモもしたし完了つと

『お疲れ様でした。あなたのデバイスはサービスカウンターにてお受け取りください』

終わったみたいだ。なんだかんだで疲れた・・・

「よし、デバイスをもらいに行くぞ、その次は早速バトルだ！」

「ははは、もう疲れたんですが・・・」

「何弱気なこと言ってるんだよ、ほら行くぞ」

「諦めた方が良くぞ雅也、加賀の性格知ってんだろ」

「知ってますけど」

「鷹月君、早くしないと時間がなくなっちゃいますよ」

「確かに時間が無くなるかもしれないけど、僕の時間は既に無駄だらけな気がするんだけど」

結局のところ、VBデバイスを受け取った後3人に引っ張られ、ダ
イブユニットへ入れられた

「いいか、ここにデバイスをセットすると、その下からタッチパネルが出てくるからそこにパスワードを打ち込むんだ。

そうしたら五秒後にバーチャル空間へと飛ばされるからな」

「分かりました」

「じゃあ、バーチャル空間でな」

そう言うと加賀さんは僕が乗っているダイブユニットから離れていき、他のユニットへと乗り込んだ

僕はハッチを閉め、加賀さんの説明通りに操作した

「はあ、五秒後って言ってたな、・・・何でこんなところに居るんだろうか」

冒頭にも書いてあったけど、口に出さずには居られないほどに不思議だ

何でこんなところに、僕はいるのだろうか

3・2・1

【ダイブ・イン】

そう目の前の画面に書かれてあったのを見た気がする

そして僕の意識はバーチャル空間へと飛ばされた

その先に加賀さんや風風兄妹とは別に、知り合いが居るとも知らず
に・・・

01st Battle 『運命の始まり』(後書き)

【次回予告】

初のダイブバトル、雅也はどう対処するのか
そしてバーチャル世界に居た知り合いとは!?

02nd Battle 『厳しい戦い(仮)』

02nd Battle 『初めての戦い』（前書き）

はい、どうもお久しぶりです
投稿者の刻焔です。

今回は今年最後の投稿となると思います

実際はクリスマスや正月イベントなどをやりたかったのですが
余りにもキャラが少ないし、出てきていないキャラを出しても

『こいつ誰だ？』『この作者、投稿して間もないのにイベント書き
やがった』とか

思われそうなので見送りました

まあ雑談はここまでにして、2nd Battleをお楽しみくだ
さい！

02nd Battle 『初めての戦い』

バーチャル空間へと飛ばされた僕が目を開けると、そこにはどこまでも続く草原が広がっていた

「すごい…」

「ここは草原エリア、初心者が戦いやすいように設定されている」

僕が目の前に広がる草原に見とれていると、後ろから加賀さんが説明してくれた

そして加賀さんの近くには風凧兄妹もいた

「加賀さん、……すごい装備ですね」

そう、目の前にいる加賀さんとはにかくすごかった

何がすごいのかというと、黒いコンバットブーツ、黒のジーンズ、黒いシャツに黒い革ジャン
メツチャクチャ黒かった

夢路さんの衣装はまるで格闘家のような感じだった

赤いバンダナ、赤いシャツに黒いズボン、腰には白い上着のようなものがベルトで止めてあった

風凧さんの衣装は二人とはまた違った感じでした、西洋の鎧とミニスカートを混ぜ合わせた装備で、赤いマントが目立っていた

雅也が自分の衣装と比べていると、加賀がこのゲームに関しての説

明をし始めた

「まずは武器の使用法からだ、なんでもいい、使用したい武器をイメージしてみる」

「えっと、じゃあ忍刀で」

雅也が忍刀をイメージすると、右の手のひらに光の球ができたかと思つとすぐに形を変え、その光が拡散すると、雅也の右手に忍刀が握られていた

「へえ〜、こつやつて武器を使うのか」

「やつぱ初心者動きだな、なれてきたら今の倍の速度で武器を展開できるようになるぞ」

「今の倍ですか!？」

今で遅かつたんだ、僕には一瞬の出来事だったのに

「おい夢路、見せてやれよ」

「何で俺なんだよ」

加賀がいきなり夢路に話を振つたため、夢路が反論してきた

そう言えばみんなはどんな武器を使うんだろう

「良いじゃねえかよ、この中じゃお前の展開速度が一番速いんだから」

「チツ、仕方ねえな」

その言葉の直後、夢路さんの手が光ったと思うと、既に武器が握られていた

「は、速い…」

「夢路の戦法はガンブレードで相手をひるませ、一瞬の隙を突いて魔剣でとどめを刺すからな、自然と展開速度が上がったって訳だ」

「へえ〜」

僕もあそこまで速くなれるかな、試しにもう一度やってみるか
今度はクナイをイメージして…

左手にクナイを持つイメージをすると、再び、丸い球体が現れ、それがクナイの形へと変わり光が拡散し、雅也の左手にはクナイが握られていた

「くそ、やっぱりまだ無理か」

「当たり前だ、俺がどれだけ苦労したか分かっているのか？」

「兄さんは毎試合、試合前と試合後に練習してましたからね」

「よく続けましたね」

「ああ、根気が必要になってくるから、加賀には無理だろうがな」

「あ、あつ!?何だところら!」

「おっと、聞こえてたか」

「てめえ、待ちやがれ!!」

夢路はイタズラに笑顔を作るとその場から逃げだし、加賀が夢路を追いかけて始め、取り残された雅也はどうしようかと悩んでいると

「鷹月君、とりあえず今日はこのゲームになれることから始めたら?」

「そうだね、しばらく素振りでもしてるよ」

そういうと、雅也は一人になれる場所へと移動した

「……ふっ!……はあ!」

素振りを初めて三十分がすぎた頃、雅也もこのゲームに慣れてきていた

「あいつはいつまでやってんだ？」

「あ、加賀さんと兄さん。そうですねえ、多分三十分くらいだと思います」

「かあ、あいつもよくやるねえ」

「俺よりも忍耐力強いんじゃないか？」

「ん？あれ、いつの間にみんな集まってるんですか？」

雅也は今まで見ていた冬美の事すら気付いていなかったようで、驚きの声を上げる

「まさかとは思うが、今まで気付かなかったのか？」

「はい、ずっと一人だと思ってましたから」

「……これはもう忍耐力じゃなく、集中力の方が正しいよな」

「……俺、ここまで集中力の高い奴見たことねえよ」

「……私もここまで集中したところは見たこと無いですよ」

上から、夢路・加賀・冬美の順で驚きの声を上げていた

「んで、どうだ？このゲームの感覚はつかめたか？」

「はい、後は実戦で試してみるだけです」

「そうか、ちょうど四人いるしチーム戦でもやるか？」

「おっ、いいなそれ」

「そんじゃチーム分けだが、夢路は雅也と組まないか？」

「え？俺は別にかまわないが」

「僕も構いませんけど」

「よし、じゃあ俺と冬美ちゃんまで」

「ちょっと待ってください！」

加賀が仕切り、チーム分けが決まったと思いきや、そこへ冬美が抗議してきた

「なんで、なんで」

冬美は腕が震えるほど力強く、握り拳を作っていた

「なんで、私と兄さんのチームじゃ無いんですか!!」

「ええっ！そこ怒るところかあ!!?」

「冬美、今日は諦める」

「でもでもお」

「でもじゃない、たまには良いだろ」

「そうそう、たまには夢路と違うチームでも良いんじゃないか？
それとも何か？俺じゃ頼りないのか？」

「はい！」

「即答！？しかも無駄に元気が良い」

「だって加賀さん、いつも味方の邪魔してますし」

「そ、それは味方になった奴が俺の前に出てくるから」

「おい、それは言い訳になってないぞ」

「うゝん……」

突然加賀さんが黙り込み、何かを考え始めた

ここまで考え込む加賀さんは珍しいかもしれない

「おっ！そうだ。冬美ちゃん、ちょっと耳貸してくれない？」

「…なんですか？」

ちょっと嫌そうだけど耳は貸すんだ

耳元で何を言ったのかは知らないけど、突然風凧さんがピクツと反応をしめした

その後、僕と夢路さんの元へやってくると同時に

「私加賀さんと組みますから!」

つと、宣言してきた

一体加賀さんは何を吹き込んだのやら

「よし、メンバーの問題は解消されたから、次はフィールドだな」

「フィールドは俺が決める」

「夢路さんが?」

「不服か?」

「いやいやいや、そんな事無いですよ」

僕はてっきり加賀さんが決めるものと思っていたから、つい口が…
今度から気を付けよう

というわけで、フィールドは夢路さんの決めた『森林エリア』になった

「おい夢路、仮にも初心者が居るのにこのエリアは無いだろ」

「良いじゃないか、俺も始めたときはここが最初だったしな」

「まあいいか、慣れるにはちょうど良いだろ」

「じゃあ始めるから、準備しろよ」

夢路さんはタッチパネルを出現させ何か操作している

「これでよしと、3秒後にランダム転送されるからな」

「え？一体何のことで」

僕の言葉がそこで止まった理由は、突然景色が変わったためである

「……なるほどね」

僕は周りを見渡し、何が起こったのか理解した

つまり、夢路さんはバトルを開始するために、チーム分けとそれぞれのスタート地点を決めたのだ

僕が納得すると同時に、目の前にシグナルが出現し、赤いランプが点いた

これが青になればスタートの合図なのだろう

「……………」

一瞬の沈黙の瞬間、シグナルランプが赤から青に変わった

…もう見飽きた。

僕は十分ほど、この森林の中をさまよっている

「はあ、いつになったら加賀さん達を見つけられるんだよ」

もう何度目になるのか分からないため息をついた時、どこから音が聞こえてきた

「…近いな」

僕は忍刀を構え戦闘態勢に入り、そっと音の方へと近づいていった

「あれは…」

そこにいたのは、トンファーを構えた加賀さんだった

しかも僕は加賀さんの後ろを取っている

これは、チャンスだな

忍刀を構えて、よし行くぞ!!

「先手必勝、加賀さん覚悟！」

僕は茂みの中から、勢いよく飛び出した

そこまではよかったのだが

「あまいぜ雅也！」

その言葉を聞いた瞬間、僕の目の前に何かが降ってきた

いや、降ってきたではなく、降りてきたが正しい

零夜LG（雅也）

20

16

「こんな単純な手に引っかかるなんて、まだまだだね鷹月君」

降りてきた人物は風風さんだった
しかも降りてくると同時に、僕の体をガンブレードで切り裂いてい
った

「…あの、どのくらいダメージを受けたかが分からないんですけど」

「ああそっか、まだ話してなかったな。このゲームでは自分のラ
イフは見えないんだ。

どうしても見たかったらメニューを開いてステータスを確認しな

僕はステータスで確認を取ってみた

「…4ポイントも削られたのか」

「ライフはMAXで20。これがゼロになると強制的に退場つて
訳だ」

「へえ」

「だから」

零夜LG

16

14

「のんびりしてたら退場、ゲームオーバーになるぜ」

解説をしていたと思ったら、いきなり僕の腹をククリに持ち替えた加賀さんが刺していた

「ちよっ！それ反則でしょ！！」

「何言つてんだ、本番じゃ誰も待ってくれないぜ！」

加賀さんは再度トンファーに持ち替えると、僕に襲いかかってきた

「私も忘れて貰っては困ります！」

加賀さんの後ろからガンブレードを持った風凧さんが突っ込んできた

「くっ！」

僕は何とか後ろへと避け、攻撃を回避した

だけどそれも束の間、ブレードモードからガンモードへと切り替えた風凧さんが容赦なく撃ってきた

「油断大敵ですよ！」

「そう言っお前も油断大敵だぜ！！」

タナトスLG（冬美）

20

17

加賀さん達のもつと奥から声が聞こえたかと思うと、誰かが風風さんを背後から切り裂いた

「よう、遅くなって悪いな雅也。おっと今は零夜か」

「夢路か！いつの間に」

「冬美がガンモードに切り替えたあたりから、お前らの後ろに居たぞ」

「はっ！ようやく面白くなってきたぜ」

「第二幕おっ始めようじゃねえか！..」

加賀さんがククリに持ち替えると同時に、夢路さんに突っ込んでいき僕は手裏剣とクナイを取り出し、夢路さんのサポートに回る事にした

「いや〜楽しかったな」

バトル結果は引き分けとなり、現在僕達はダイブセンターからの帰宅途中である

「もう、疲れましたよ」

「何言ってるんだよ、惜しかったじゃねえか、あそこで俺に一撃喰らわせなかったら負けてたかもしれないんだぜ？」

「そうですよ。最後のクナイでの一撃がなかったら、引き分けにはなりませんでした」

「初心者が加賀と良い勝負をしたんだ、素質あるぞ」

みんなが褒めてくれるのは良いけど、正直言っただけで肉体的にじゃなくて精神的に疲れたのがきつい

「いえいえ、僕なんかまだまだですよ」

「明日もやるか？」

……本題とも言える言葉が来た

今日やってみて、答えを出すんだっとな

答えといっても、もう決めてるけどね

「…はい、やります！　そしてこれからも！」

力強く、僕は答えた

試しにという事でやってみたが、本当に楽しかった

何度も危ない場面が合ったりしたけど、それをくぐり抜ける時の面白さ
相手の予想外な動き、武器を使うタイミング、どれをとっても心から楽しめた

だから僕は、これからもやり続けると答えた

「よし、その意気だ！」

「分からない事が合ったら何でも言ってこい、教えてやるよ」

「はい、ありがとうございます！」

これからどんなバトルが出来るのか、そう考えていると
VBデバイスにメールが届いた

「なんだ、メール？」

メールを開き内容を読むと、僕は目を疑いたくなった

「どうしたんだ雅也、……これは」

僕の様子がおかしかったのだろう、みんながデバイスに表示された
メールを見始める

『まずはダイブバトルへようこそ

さっきのバトル、ちょっと興味があつたから見物させて貰ったよ
そして思った、君には何か特別な力があるんじゃないかって
そこでだ、今度俺とバトルしないか？

日時はまた追って伝える。

イバー：オーディン』

「オーディンっていったら、イギリスの様々な大会で優勝したって
いう、凄腕の持ち主じゃねえか」

僕はその言葉で、余計訳が分からなくなってきた
何故そんなすごい人が、僕なんかに挑戦してくるんだろうか

僕が考え込んでいると、突然夢路さんが声を上げた

「おい加賀！とんでもないもんが載ってるぞ」

「なんだよ、こっちは雅也のメールの件で考え中だったのに」

加賀さんは渋々夢路さんのデバイスをのぞき込む

「なっなに！！？」 『飛天・暁が謎の介入者から攻撃を受け強制退場
！？』

ちよつとまで、今日の試合には燕も出てるんじゃないのか？」

「そうだったな、確認を取ってみる」

夢路さんが携帯で燕さんに連絡を取っている
加賀さんの指示で、スピーカーがONにされ、みんなにも聞こえる
ようになった

『……ダイブニュースの事だろ？』

電話に出てくるなり、いきなり本題に入った燕さん

みんながあわてている理由は分からないが、燕さんの声からしてとても深刻そうだった

そして燕さんの次の言葉で、全員が凍り付く事になるとは、誰も思わなかった…

02nd Battle 『初めての戦い』（後書き）

【次回予告】

突然のメールに驚愕する雅也

そして『飛天・暁』というダイバーの敗北が何を意味するのか

03rd Battle 『飛天の意味（仮）』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2243y/>

Future Battle ~ 星屑の記憶 ~

2011年12月27日20時47分発行